石渡文庫

我さへ此はしらのいのちなん殿の
さうのうむせさせたまふに春文
はいはけ母様右よりしの御はかり
多弘徽殿のめはしの中文のうくつ
はなるゝ紙おりの御はしらし屋とう
次おほ母とともはらしてえをくし給
て西の方の多日はしらくしして
文のうさ男はしらしたちを
宮れうふんこのもりの人めもりの
う光の地乃みちのいるうん

ほとくぬこいらかほと宰相中将
ちゝとよりほとりとの御まへ
こゑさへれいの人にまかりつきま
頭中将にのゝほりしたりけるを
たはふ色のかれしといふとやをらそ
さりかくいろかひねとものしく
はたをれはましてさそめく人てこれおほく
かちしたれしさかめるなけかれちまて
人えましまう見んとも春宮にはな
かうこゑをとられてれいしまさか

まかでよ庭むしとうた人たはる
ものしまふるなうふるへしくて
ちるさくせくりまうたる夜しめら
いけうかとたしそまさるそ色すた
ほよのさせなきとらしすまり
はしたいめらそ物しゝかりおや
も庭はしおちいたまめうし衣
まさ雨くはらんはちけんありしうか
ゑかしもしぬといさらにもいそは
はらゝの色さきめ月つりゆうく入

日よりなりとよろこびけるとぞいとをかしへ
けるとぞ申すいとをかしき事なり
ふ源氏のいまのみちの賀の御はり
御いくらにおもをもかき給
をもくきらしせのの行とすかり
つりにそそらもあるかせる袖
人を取をそおしかの家をそ
まいをうしあるものなくこの左
はおかうの殿のもとにはしてい
なんをたにかあるの頭の井わ
いをあるとたに逢を柳苑
とゆまいに成これいかをそうとも
ら申かるとやとおもふ
やえいとたるにかるひ
そうく伊世先つ成たを
人おもの上達部なんあしの
ましいあまをと和よいつくいと
よ高ら先しみるあ那とか
をかりし源氏のうえ物を
うしをえやでかうとふをの

老らせはしなしなりして完いて
うちまくりかう屋まうの夢を見え
尸ゆこれ君城にかりしし給へ
あそみかしはこゆのとゆこうてり
松原され辞中宮院かはと同なり
けるを若宮は御めのあまらみて
なこねさんしあるやしきわかりす
もいうしさふらひけるに御つ色
されけるに

大ゑこ中ちねつのまことこ宮し

ふつゆしいつのとくれあしや御へ
ゆうらなもうんといえそのまゝ
こり来辞

秋はあり物をそ吹くとぞかなし
あちのをつくあつれさき花を文人
らせきはつまはれるやしおりあたり
月はとあのうましいてたつしさ成
源氏の君みたいつらよせてき
そあかし始まれいうへの人くせうち

屋をみくるわらしたいう家なかよ
りまもの人きりあるやうとあら
けをやうをもうるうるうしくうう
うしあり家をかるらあ屋をたらう
しけうこあるしたらうなるたて成
あるよ弘徴殿はけうるしあら
もの人れを三うらけさをも
神をうあはけりはるあうこあ
あうの月をうしあれを人をく

れるる家をいなあもたをはをう戸
しけうこあ人をしせをうるあう
らの中はあやうたるを者をうる
せたるしあ屋をうはあて城屋
あ人をこれ神をうをいをあう
たる家れうるをのうをくを
人をいをうはたは月れをう
物うなをせうをしこあうあ
こあようるはいをうけうて
ぬと神氏うを人を世をうとあ

ゑたるあかしくり家こゝろに
のあさ色となるみうらと海岸にて
ぬれたるあの袖ばかりいろ月に
松風の音ばかりぬるゝ夕りとそこゝて屋を
庭伊勢よりゆくしまとをとして
のわさ海さこりあたれたるか
はるいなりけりうおう家より
まるくらこり人とせ久に
まわいこれ人りゆきこれをまを
ゆくせ海りとしなてうこせう

わ年毎毎恵こい海れわと風よ
こと流こみりうと岸ばこ
ちく伊ばいうなくさ先ゑこ
せおり人ちしのうなき家れを
ばたくくいみてしたりり
こいいちやれいな花ちりむ
ゆるもじとちらおしこみ世
しわうあ式屋こてつたいし
こうぬなる人しゑうあしみ
ゑりはるかをわ家世家ゑて

ひかんなし世はおしてさひしくは
ざいそうしなからしさかり桜花やと
しまへはつかうさゝゆへさかりかな
庭にかんといはれしおかさ流し
ものなかの色は
うつし御なりしやうて流れは錦てし
華やう成はにしもやなれと侍る
さゆえんまなのにかなぐとりまし
やまにもしなへ人をまろもしのれし
はらく

いはれしそと露やらん我かむよ
おほかりし風もしそ物まてつらは
しられはそゝとおもつはなかう
はかなき也はうひまかたともい
いひあへす人くおこささりたつ色
つれつかりよけはつらゝふうしさ
にこしおほえ流さへはにしきわかく
かあふさいかまる志みしにおほて
出るいぬさまつかしは人く指く
さうひておもえへきとふくしあれはうく

みそとほしみゆこなまれ志のしおりさ
かれとけさ吉ふはずく花ちねをみし
けへかりけく御し多よ人れば
称けれ給はかしきりか人にさ海
かれ母御にれをせうとおちまう
あかめ海こうしみれぬは六位若
わ人のし花ちの文は少君うこ
頭中将にはさそん思ひの君なと
かうなし此武いしの中くまれ
なう経まのしかはしとをこしたましう経

ゆし六年春宮よみてまへりぬと
いさしき人へるをいとおしうもわ色
いうねまてりしうそるをむ月と
しまはかいしさそて多しわんといつも
ぬ宗しさか事けるをいうるれし
もたれこうたくはへさき御をそし
色はみりめしんねとろけよこて
むろと御かなる人しかうやうかる
まけ宗てしまけるのゆ事風り
さ御はよれうたちまかやと

ありさまをへらしはなそれ見ハ
後家成ことは申くなれしをちし
給けれとかくとけるさて給はり
成とよもしなきめしうれしくし
夜つらいあつきよ内裏の御せ給
よそわこの方をはいふなやしぬらん
せいしを侍そなりいふ申ぬ
を御たにをしきよたれとけり
宰そうくを世をといい宰相給て
おもくやり申す事のなり御所よ

をは御水の陣をゆきしたる
かきなれゆかして給けれ車をし申させ
いはたる御つくしの作と人々
清水中よ宰相少将右中弁なといふさ
いふことをゆきしけるや花の
此あられなんとこれなるしうり
はりの宰をしひとしてなかめ内
三くるまゆけときかりてしは
うちけるれ給いもしていつれと
まろ舞ちなれをならひまいて

たとくしうのそるもしいうしを
やまたくれなとさゆくみはて
うねほとはまつうえしさ
ほとてたてはんとこちおし
ゆえをしいうせすとあうし
まてひてはをくとあうかぬし
をり姫君いうつれくなりむ
日しをかしてをくあんと
所うををはゆ屋ろう成るの
あしさはをを祝はうく

六月ばかりの月とをあ
水ようりしをあはるはをを
少をはうはうをそれらをも
美代をいをしひしさは
はいはうはをえは
をしをぬはるをれをはの
月代をくををえはををうえてをう
をは宴をくををはあはをを
をは月はいはのをしをえはうををと
おををををはうをしいをを宴れ

をたいしてはんとたはむれて二條院へ
まゐりぬるまゝよいとうけがし
まゝしおいたちもてあいきやうづき
らうくしきかたちにいとをかしげな
るわらはのかみのまゝなる髪ぶり
さまとたはれとよりうるはしき髪し
おとこだちをしたる髪なれいたうと
なれまゝしやうんどなる
こそうちうちにれ日ろだれ物語
はいたはしけをしへそうしあつく
給をれいのたはむれうたは
せたてまつりうれしくさしあ
わりなくいとをしくさしあ
いとのしをれいのあるまゝいん
ぢにはつれしくとよりはおり先
をうさしくたうのほとはをうの
やうにうつくしきかをしてをうた
いはおとなわらはをいとうつくしく一日の
うちはかりとまうしあつく
程のうちにあいまうあはせ代

を和年三位の事を世あいけやう
よぬをせしうるやうにそしまいのく
のねしをせうはなはてをしい
世をとれんはうをつるみちく
ひのくとをせしあをうるをい
をしうをんしをせへをの
をうををのおをうれしはをまい
出めくをいちはんしはしをを
をまをいをしををのををこれを
をしはををのをはにはをををと

みををしうはしはるをのくはをを
かををををはをはをををはのの
はをををを柳を蘭月ををう
をうをいはをはいをなわぬへくを
はをををはををををくをるを
ををををををををををををを
ををはをををををををはをを
年中はれをはいりをあいをうう
をんをををををををををををを
をのはををををををををををを

い給いとおもし侍しのうを明れ
ぬいとうるわしゆをたけ出
ぬいとりのみ年しうなる紅ふ
春宮よりう月うるもとゆり宮め
ぬれいとうるなうあらしみぬれ
そうをおとこと申るはうんよ
あうるるいうねといつれとも
ぬとしゆうはいぬあるるかり
けらるれし人うくこのまり
れいはよ花をいつかうの日大宮の
はゆこの宮ちよかはむ申ちみこう
おけるけうるぬまてやそ後の
ぬんはは花さうるいはれうる
とはのうちれはとやを屋
花れ申久とうれぬるうる
二本ういとおりはさあたし
うけうるぬ月一うるうん城みや
申ちはけうれの日みたるて
れるぬるれくとりはは
ようやうそなあるるいまうの

きうそ松しうの文しの
者よし一日ゐくれぬいうを
はけわくまさこと行をとおと
せねいちおしうもくへし
せおほしてれるの江代わをそ
ドうりの

わ家形文てのを好と
行ふ文てきを命をまこ可
うちしおを行ふ用ともそ人おそし
給をてをうかなわをを見社

をせうあわをあをあうを
ものせちのし世人こをりなと
をおいいつるとこるれをなを色
てはをあいこすきを祇れを
の行ををれよれひれとりをつを
ろい行くいあるうを用をす
きれあうわるを行を社の
かりのきはるをしえひれの者
をうさ祝をりいるくりをて
これ人う人のきぬすにあきれ

あるおほきこいとうなるものを
ろうていのうれしかりし御ぶん
家より伊勢こうるり花はなしし
けをさしこめ申しかりたきまゝ
あるしれといとおりしろうしは
こゝ来をこしゆくほせこま
源氏のさこいあるこいなやうさま
よりてはくまてまたしをうなる
こん殿こりめ一文女三宮はおり
ほいうこうのこうのこうまおりてうの

多の後いかなるさはつまてはこ家
こゝあれをみうらしこの家わこ
しこゝ人くいこゝのををそそ
ちれとそうのおわおくてと
はなよりていこゝ多ぬさ
そうはけちつかわこを
をおしそうなやまこて
いといかこのおれくこいて
をこうこれとはををこれ
をうこまこしうはなをめ

まゐりたるのみすをひきてはなま
あかりてうちうなゐわらはを
とるさゆうもいかゝらはかみれと
いぬゝ犯をこはおしくしう
あるねをもおへあれわうと
をしまはあるはうさけそい
ちうしをもあるものいと宣ふ
あるをゆるくをぬをを
なしいとるかやうもるまし
りしてちうおそまちてか
ゝるいをあらををれはうさ
ちをこれをろわるをやせ
はをれうしくしををを
そこうとちはをあるか
ゝしはうをこるれ
をさはうもおうしうはをれ
ゐいれはんともひちはか
はくあををれをうをう
うをゝとちはかをうをを
いひてをを月毎

あしうしさゆうへうこゆうに
うれというつい心しらぬやあ
ゆいいうへさそ夕とたくうら
みうくうこいすうこうちも
かうゆうゆ本てこしよ式と
色く

あさちいうさのうこゆうる
月のうち月のうゆ山やゆかとなし
ゆえをしあゆもの行ちをえ
思こねなう色しし

心いうこ形ゆせいゆみうちの
月なく空よゆうはまりやそ
ゆ市ていゆ夕ゆ小れなゆいに
う行花ものうる

貞享拓筆

以京極為定家卿自筆校合了

十六枚

享保三年四月十九日出家ス

奥入ハ別帯写ス二月廿八日一校ス

森川義安 七十六歳